

論文題目 平安朝物語文学における賛美表現

——「ことなし」「こともなし」「たぐひなし」「ありがたし」を軸に

泉屋 咲月

論文の目次

序

第一部 『源氏物語』以前の賛美表現

第一章 平安朝物語文学における賛美表現の予備的考察

第二章 『うつほ物語』における「たぐひなし」—俗世の賛美

第三章 『うつほ物語』における「ことなし」「こともなし」—完全無欠の美

第二部 『源氏物語』における賛美表現

第四章 『源氏物語』における「たぐひなし」

—光源氏にとっての「たぐひなし」の独自性—

第五章 光源氏にとっての「たぐひなし」—紫の上へのまなざし—

第六章 『源氏物語』における「ありがたし」

第七章 『源氏物語』若菜巻における「ありがたし」—紫の上賛美をめぐる—

第八章 紫の上賛美に関する一考察—「たぐひなし」から「ありがたし」へ—

結・

資料 『源氏物語』における「ありがたし」本文異同・

既発表論文との関連

主要参考文献一覧

使用本文一覧

論文の要約

平安文学においては、膨大な数の賛美表現が用いられている。その中には、文脈によって結果的に賛美の意味を持ったものもある。文脈によって賛美の意味が生じ、それが表現として定着することは珍しくなく、そこには美に対する意識や言語的な感覚が表れる。物語においては、その表現を用いた作中人物の美意識が示されるだけでなく、美質を表現することに対する意識も表れる。作品を読み解くにあたり、場面や文脈をふまえて表現を解釈することは不可欠である。しかしながら、なにかを描写する時に、ある表現が選び取られているということをふまえると、賛美の意味が生じる前の意味も重視されるべきである。

こうした問題意識に端を発し、本論文では、『うつほ物語』と『源氏物語』を対象に、文脈によって賛美の意味が生じる表現について考える。その上で、ある表現を、美質を語る手段として選択する言語的な感覚や表現意識を探り、両者の関わりを考えることで、作品解釈にあたっての新たな可能性を提示することをめざす。

平安時代の特定の語の意味についての研究は、枚挙にいとまがない。また、文法的・言語的な側面から、ある語について詳細に分析した研究は多い。あるいは、作品内のある語に着目し、それをたどることで何らかの特徴を明らかにしようとする試みも数多くあった。

本論文は、ある表現から物語の解釈を試みる研究の系譜に位置づけられる。しかし、文学作品において用いられる賛美表現について、本来の意味との関わりから検討することは、従来試みられてこなかった。作品の解釈においても、対象をよいものとして捉えているという文脈だけが漠然と把握されているに過ぎないことも多く、それがどのような賛美であるのかということは看過されがちである。

本論文では、ある人物を賛美するために用いられる表現のうち、賛美に転じるものとして、「ことなし」「こともなし」「たぐひなし」「ありがたし」を対象とし、その語が選択される際の言語的な感覚、本来の意味との関わりから見えてくる美意識について検討し、物語の解釈を試みる。その語の本来の意味と、文脈によって生じた意味の関係を分析することで、単なる常套的な賛美としてではなく、個別の必然性をもってその表現が用いられていることを明らかにするところに本論文の意義がある。

本論文においては、賛美に転じる表現について、作品内の具体的な用例をたどることで分析する。それにあたってはまず、作品間の差というものをふまえないといけないだろう。物語として成立した順序だけでなく、それぞれの作品が抱える論理や美意識、表現意識や言語的感覚といったものがあると考えられるからである。そのため、美意識や物語としてのあり方について、本論文の立場を明らかにした上で、作品の具体的な用例をたどり、検討を試みる。

『うつほ物語』においては、「ことなし」「こともなし」という表現が、賛美表現として多く用いられていることが確認された。後述の「たぐひなし」と同様に、「ことなし」「こともなし」もまた、宮廷的な美に対して用いられることが圧倒的に多い。三春高基による滋野真菅に対して用いた一例を除けば、すべて宮廷社会の価値観に根ざした賛美である。一方で、本論文第一章でも触れたように、『うつほ物語』が、宮廷的な美質に対する批判的視線を抱え込んでいることは、見過ごしてはならないであろう。ある価値観においては「ことなし」「こともなし」とされる、完全無欠であるはずの美質は、視点を変えれば批判にさらされるべきものなのである。このように、「ことなし」「こともなし」を相対化する価値観が示されることには留意されるが、結局のところ物語内では滑稽な文脈の中に処理されてしまっている。

それに対し、『源氏物語』において、「ことなし」「こともなし」という表現は玉鬘と明石の君に一例ずつ用いられるが、この二人の作中人物の美質を特徴づける表現とは言えない。『源氏物語』においては、「ことなし」「こともなし」と賛美される対象が実際には欠点を抱えているか、あるいは、よりよいものの存在を言うための一時的な賛美に過ぎないのである。

第一章において取り上げた先行研究からも明らかのように、『源氏物語』はそれまでの物語とは異なる文体を持っている。『うつほ物語』と『源氏物語』における、「ことなし」「こともなし」の用法の違いには、両者の美意識の違いが表れている。『うつほ物語』においては、対象が持つ個別の性質やその時にしか捉えられない一回性といった具体的な性質が排

除された、抽象化された美を言っているように思われる。絶対的な理想を描こうとすると、おのずと抽象化されてしまうのである。『源氏物語』においては、対象の持つ個別性、その時その瞬間の一回的な美しさに目が向けられているようなのである。また、『源氏物語』においては、誰がどのような時に捉える美であるのか、ということも、描き出されている。つまり、美とされる側だけでなく、美を捉える側の個別性や一回性にも注意が払われているのである。賛美される側と賛美する側の個別性や一回性を描くことは、すなわち、美そのものや美意識を相対化してしまうことであるのだが、そこに現れるのはより現実味を持った美である。

『うつほ物語』においては、「たぐひなし」という至上の賛美が、宮廷社会における理想的美質として描かれている。しかしそれはあくまで宮廷社会という現実的な世界での美質であり、そうした現実的な世界とは別の、秘琴伝授にまつわる伝奇的な世界における美質とは全く別に描かれている。

『うつほ物語』は、物語内の矛盾だけでなく、絵詞という『源氏物語』にはないテキストを抱えており、あて宮求婚譚と俊蔭一族の物語という二つの物語世界が統合されて現在の形になったものである。書かれた物語としての性格も、語り手の視点も『源氏物語』とは異なる。そうした事情を考えると、『源氏物語』と単純に比較することには注意が必要である。しかしながら、『うつほ物語』における「たぐひなし」が、貴族たちが営む社会における最上級を示すものとして用いられていることを考えれば、『源氏物語』以前の「たぐひなし」が、対象を多数の人間の中の頂点として位置づけるものとして用いられていたことはたしかである。

『源氏物語』における「たぐひなし」という至上の賛美は、光源氏が二人の人物に用いるところに大きな意味があった。他に比べようもないほどの至上の美を言うことと、二人以上の人物を対象として賛美することは矛盾するからである。このような、光源氏が用いる「たぐひなし」の持つ、一見矛盾した性質は、光源氏による藤壺思慕を象徴するものであった。どのような女君を妻に迎えても、どうしても藤壺をこそ理想的人物として頂点に据えてしまう光源氏が、藤壺に対して、あるいは、藤壺思慕に根ざした目で紫の上を見たときに、なんらかの美質をそこに見出す時に用いるのが「たぐひなし」なのである。光源氏の用いる「たぐひなし」には、物語の方法としての〈ゆかり〉の論理が見てとれる。

「ありがたし」については、『源氏物語』第二部において、特徴的に用いられている。そもそも、「ありがたし」とは、存在することの困難さを示すのが元来の意味で、そこから対象を賛美する意味が生じた。本論文第六章において、こうした存在の難しさを示す用法が『源氏物語』第二部において頻繁に用いられていることを指摘した。それをふまえ、第七章においては、紫の上を賛美するにあたり、ことさらにこの表現が選び取られている理由を考えた。『源氏物語』第二部にける「ありがたし」は、この表現が本来持っている、存在の困難さを示す意味と深く関連して用いられている。「ありがたし」によって賛美されることで

維持されているかに見える紫の上のあり方——女三の宮より優位に立つ、光源氏の実質的な正妻の立場——の困難さというものが、「ありがたし」が本来持つ存在の困難さによって示されているのではないだろうか。

「ありがたし」という賛美表現は、対象の優れた性質を称揚することはたしかである。常套的な賛美として、ほかの表現と互換性を持って用いられる場合も、もちろんあるだろう。しかし、少なくとも『源氏物語』第二部の紫の上に対しては、紫の上が優れていることを示すだけでなく、そのあり方の希少性に意識が向けられているのである。

このように、光源氏が紫の上に対して用いる「たぐひなし」「ありがたし」という賛美表現には、それぞれ大きな特徴がみられる。そしてこの二つの表現を比べると、若菜下巻に至ると、「たぐひなし」から「ありがたし」へと移行していくことに気づく。この移行は、紫の上の描かれ方の変化として捉えることができる。〈ゆかり〉としての紫の上を描くことから〈ゆかり〉の枠組みの外側で、紫の上を独自の存在として描くことへの移行としてみることができるのである。

本論文においては、考察の対象を、「ことなし」「こともなし」「たぐひなし」「ありがたし」という表現に絞った。これらを見てみても、対象を賛美するという点は共通しているものの、それぞれの表現が持つ、美を捉える際の視点は異なっている。そしてそれは、それぞれの表現が持つ、本来の意味と密接に結びついているのである。それぞれの表現を賛美表現として用いる時、そこには何をどのように美ととらえるかという美意識や、どのように賛美するかという言語感覚が表れている。このような、賛美表現から読み取れる美意識や言語感覚は、物語を読み解く足がかりになるのではないか。